医師座親玄山と井上侃斎

太宰府に縁が深く明治時代の福岡で活躍した医師に、座親玄山と井上侃斎がいます。この縁戚関係にある二人は、いわゆる村医者・町医者であると同時に、明治初期の福岡県下に新しい地域医療システムを作る活動の一端をになった人物でもありました。

座親玄山は安政4年（1857年）12月、医家座親家に生まれ、明治15年（1882年）医術開業試験に及第の後、太宰府町で開業します。彼は満12歳の時から堅粕村の漢医加藤盛清につき3年間修行した後、博多川端町の医師井上鉄英の元で蘭方医学を学びます。3年後満17歳で福岡病院（東中洲に設置。明治12年に県立となる。医学校併設。現九州大学医学部の礎）へ入塾、その3年半後には東京に進出し、東京府立病院で外国人教師から内科・外科を学びました。彼が最新の医療知識を携え、いよいよ太宰府で開業するのは明治15年5月、満24歳の時です。

井上侃斎（種次郎）は弘化2年（1845年）3月、太宰府の医者船越俊達の家に生まれます。満33歳の時、10歳下の弟とともに、玄山も師事した井上鉄英の養子となります。この弟とは、「偉大な哲学者」として名を後世に伝える井上哲次郎。鉄英の妻は種次郎・哲次郎兄弟の叔母にあたる人物でした。なお、座親玄山の弟寛次郎は、侃斎の長女と結婚し井上家の婿養子となります。

ところで玄山・侃斎の接点は、親戚であり同じ師に就いた医師同士であるところだけでなく、当時福岡県内で医師の職権拡張運動や学究活動を展開した「玄洋医会」の設立運営にも深く関わった点が挙げられます。玄洋医会は県立福岡病院を本部として発足した研究会で、県内の各市郡部に支部を置きました。井上鉄英・侃斎は、福岡病院の医師らとともに玄洋医会の下敷きとなる「福陵医会」を創設、侃斎は後に玄洋医会の推進役の一人となります。また座親玄山は、医会の設立に荷担すると同時に那珂御笠席田郡支部で重役を務めました。この玄洋医会は、郡部に「巡廻医学士」を派遣し臨床技術の教授や治療を行っており、その活動は、地域医療体制の整備と医療技術の向上につながると期待されていました。

市史資料室　藤田　理子

太宰府人物志
資料室だより㊸